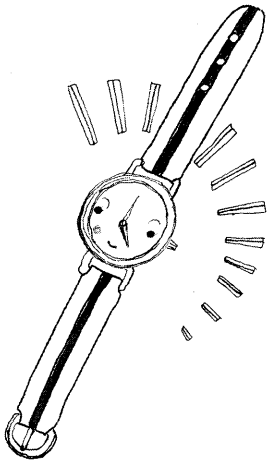
思い出の中の保育 (2)

守永　英子

三十年あまりの保育者生活に、終止符を打った。思い返すと、いろいろな思い出が、ぎっしりと詰まっている。うれしかったこと、驚いたこと、困ったこと、楽しかったこと、など、さまざまで、それぞれの思い出にかかわる子どもたちの顔が、まざまざと浮かんでくる。

〝苦い思い出〟というのもある。恐らくは、その状況にうまく対応できず、自分の中で未解決のまま、通り過ぎて来てしまったからであろう。



運動会にかかわる、いくつかの苦い思い出がある。運動会の様子は、園によってさまざまであろうけれど、私が勤めていた附属幼稚園だけみても、昭和三十年代頃と現在とでは、いささか趣が異なる。現在は、あまり長く練習期間をとらないし、全員が揃って一緒に練習することも少ない。多くは、自由な遊

びの中の一つの活動として、子どもたちの自発的な参加によって、運動会当日へと次第に盛り上げていく。以前は、小学校と一緒に運動会を行っていたという事情もあって、ゆうぎも、三歳児から五歳児まで同じものを一緒に踊っていたし、練習にも、充分に時間をかけ、出来栄えも、なかなかのものだったと思う。

私の苦い思い出は、三歳児のクラスの担任のときであった。その年のゆうぎは〝花笠おどり〟であったろうか。先生たちの手作りの花笠をかぶって、全園児が園庭で練習していた。三歳児のクラスも園庭の片隅で、小さな円になって参加した。その練習の途中で、Y夫が、かぶっていた花笠を、突然投げ捨てたのである。

Y夫にとっては、〝突然〟ではなく、それなりの心の流れがあってのことに違いないが、私にとっては、突然であった。それだけ、Y夫の心の動きが見えていなかったと言える。運動会に向けて、先輩の保育者のクラスにあまり後れをとらないように、仕上げなければならないということに、気をとられていた。Y夫に対して、どのように対応したかはっきり記憶していないのは、恐らく保育者の立場に立った、ありきたりの言いきかせだったからだと思う。“あのときは困った”という記憶でしかないのは、保育者として、恥ずかしく、苦い思い出である。

昭和四十年代の初め頃、運動会が、秋だけでなく春も行われたことがあった。年によっては、母親離れの出来ない子どもが何人かいても、不思議ではない時期である。やっと母親から離れ、保育者のそばにいることで安定を保っていた三歳児のK夫は、運動会の進行のために役割をしょって動きまわる保育者の

あとを追い、泣きながら、しっかりとスカートをつかんでいた。大多数の子どもにとっては可能であっても、生まれの遅い、一人っ子のK夫にとっては、不安を募らせる出来ごとだったのであろう。そのとき、無理に席に着かせることをせずに、K夫と一緒に動いたことが、苦い思い出の中の、せめてもの救いである。ありがたいことに春の運動会は、あまり長く続かず、何回かで、取り止めとなった。

R夫は、運動会に、どのようなイメージを抱いていたのだろうか。そろそろ運動会へ向けての活動を、保育の中に織り込もうかと思う頃、R夫は言った。「ぼく運動会しないよ」「そう、どうして？」と言っても、三歳児のことであるから、詳しい説明は返ってこない。事情がよく飲み込めないままに、自由遊びの中に、レコードの曲を流してみる。数人の子どもが、興味をもって、曲に合わせて一緒に踊り出し、他の子どもたちは、自分の遊びを、そのまま続けたり、踊っている子どもを眺めたりしている。R夫は、「運動会しないよ」と泣き叫び、踊る手を押さえて、止めさせようとする。「運動会じゃなくて、踊っているだけなのよ」と言っても、聞き入れず、玄関にいすを持って行き、そこに腰かけて、大声で泣いた。更に困ったことには、年長組の子どもたちが、庭で踊っているときも、「レコード止めてきて！」と、泣くのである。なだめ、なだめ、やっと無事に運動会を済ませたとき、R夫は言った。「これが、運動会だったのか」R夫は、一体、何を恐れていたのだろうか。

運動会のときは、保育者は大変忙しい。自分のクラスの子どもの世話のほか、いろいろな役割を背負う。T夫が三歳児クラスのとき

は、かけっこのスタートの合図が、私の役目であった。出発点から、一番遠くにいる自分のクラスの子どもたちを並べ、やっと出発点近くまで連れてきて、準備完了と思ったとき、手伝ってくれていた、実習生が、「T夫くんが、来ないんです」と言う。母親のところへ行ってしまったようである。T夫は、入園当初は、お誕生会のときも席に着かないなど、少し難しいところのある子どもである。今、呼びに行っても、恐らく来ないと思われた。準備ができて、待っている子どもたちをこれ以上待たせることはできない。止むを得ず、T夫をそのままにして、プログラムを進めた。あとで母親に聞くところによると、「新しい靴をはかせたので、それを気にして」ということのようだったが、本当に、それだけの理由だったのであろうか。疑問である。

S夫が見ている途中で、きげんを悪くして、保育室に戻ってしまい、かかわった実習生を困らせたのは、運動会の予行の日のことだったろうか。私は、運動会での役割を果たすために、S夫に対して、しっかりと対応することが、できなかった。

運動会は、〝運動会を差なく行うこと〟が、一番先に立つ。確かに、大多数の子どもは、何の問題もなく通る道であるが、中には、抵抗を示す子どももないわけではない。この子どもたちにとって、運動会とは、何だったのだろうか、と思う。幼稚園の生活の中で、当然のことと思われていることの中にも、疑問は多いものである。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園）